



社会参画に基づいた社会科教育の構造に関する基盤的研究

著者	井田 仁康
発行年	2013
その他のタイトル	Study of the structure of the social studies with participation
URL	http://hdl.handle.net/2241/120741

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 6 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009 ～ 2012

課題番号：21330199

研究課題名（和文） 社会参画に基づいた社会科教育の構造に関する基盤的研究

研究課題名（英文） Study of the structure of the social studies with participation

研究代表者

井田 仁康（IDA YOSHIYASU）

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：20203086

研究成果の概要（和文）：

本研究では、研究成果を大きく 3 つにまとめることができる。第 1 に、欧米の研究などを分析することで「社会参画」の枠組みを広く捉え、様々な授業の可能性を見いだしたことである。第 2 に、教室をベースとした授業でも「社会参加」の授業が可能であることを示したこと、そして、第 3 に「社会参画」の授業の基盤となる、地域調査の多様な方法を示すことができたことである。

研究成果の概要（英文）：

In this study, results of research are summarized in three points. The first is that it arrests a framework of participation widely by analyzing European and American studies. As second, It is showed that class for participation is possible in class room. The third is that various methods of the area investigation are suggested as the base of classes with participation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2009 年度	6,100,000	1,830,000	7,930,000
2010 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2011 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2012 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
総 計	14,200,000	4,260,000	18,460,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育

キーワード：社会科、社会参画、社会科授業

1. 研究開始当初の背景

2006（平成 18）年 12 月に教育基本法が改正され、「教育目標」の一つに「正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を

養うこと」が明示された。この影響はすぐさま社会科にも及ぼされ、結果として、その後に改訂された学習指導要領及び解説に「社会参画」の視点が導入されることになる。本研究は、このような教育動向を問題関心の中心に据え、「社会参画」の視点を生かした社会

科（地理歴史科・公民科）授業の在り方を追究するために開始された。

研究の出発点が『社会参画』が注目され始めたから」という受け身的なものであったことは事実である。しかし、本研究では、そのような現代的ニーズに応えることに留まらず、社会科の本質を見極めることをも使命として担っていた。例えば、社会科（地理歴史科・公民科）の目標には「公民的資質」がある。本研究では、この「公民的資質」の中核に「社会参画」があると考え、その内実を追究することにした。また、今日の知識基盤型社会では、知識の「習得」よりも知識の「活用」に重きが置かれている。そこで、本研究では、「習得された知識は社会問題の追究場面でどのように活用されるか」といった問いを立て、授業構想・実践過程で常にその答えを見出す努力をした。ここにも「社会参画」の視点は生かされている。このようにして、現代的ニーズに応えることを主たる目標としながらも、研究過程でその都度立ち止まっては、社会科の本質を見極める努力を継続することを、本研究の柱とすることにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、昨今の社会科教育研究・実践のキーワードになっている「社会参画」に注目し、その視点を生かした社会科（地理歴史科・公民科）教育をどのように構想できるのかを、理論的かつ実践的な追究を通して明らかにすることにある。

3. 研究の方法

上記目的を達成するために、本研究では、以下の三つの方法を採用することにした。

（１）「社会参画」に関する理論的基盤を固めること

本研究に関わった大学研究者は、研究代表者である井田仁康（筑波大学・教授）の他に、

9名の研究分担者である。唐木清志（筑波大学・准教授）、川崎誠司（東京学芸大学・准教授）、桐谷正信（埼玉大学・准教授）、磯山恭子（静岡大学・准教授）、國分麻里（筑波大学・助教）、木村勝彦（茨城大学・教授）、佐藤公（武蔵野大学・准教授）、熊田禎介（宇都宮大学・准教授）、齋藤之誉（麗澤大学・准教授）が、これにあたる。この9名が協力して、「社会参画」の視点を導入した社会科（地理歴史科・公民科）教育を構想するために、「社会参画」の理念なり方法なりをどのように理解する必要があるのかを理論的に探究した。なお、理論構築にあたっては、「比較（外国）研究」に唐木・川崎・桐谷・磯山・國分の5名、「歴史研究」に木村・佐藤・熊田・齋藤の4名をそれぞれ割り当て、個人及び各グループの研究を深めつつ、最終的には総合化を図るという手続きが採られた。

（２）「社会参画」に基づく社会科（地理歴史科・公民科）授業を実施すること

筑波大学大学院修士課程教育研究科教科教育専攻社会科教育コースの必修科目（「社会科教育学」）を活用し、これまでの2年間、実験授業を継続的に実施してきた（今年度は3年目にあたる）。2年間で実施された実験授業は、合計で12個、その内容は以下の通りである。

《2010（平成22）年度》

- ・マグロから世界をみる（高校・地理）
- ・身近な地域の調査（中学校・地理）
- ・現代沖縄史（高校・日本史）
- ・『八十日間世界一周』にみる19世紀後半の世界（高校・世界史）
- ・国際政治（核兵器）（中学校・公民）
- ・カンボジアの歴史といま（高校・総合的学習）

《2011（平成23）年度》

- ・防災教育の基礎学習—視聴覚教材としてのアニメの活用と防災マップの作成—（高校・

地理)

- ・生徒自らが探究する歴史授業開発を目指して—大正時代の人々の思い・願いをきっかりとして— (中学校・歴史)
- ・中世の法意識について探究する授業の開発—『御成敗式目』を題材に— (高校・世界史)
- ・オスマン帝国 (高校・世界史)
- ・人間性の回復と主体性の確立 (高校・公民)
- ・地球市民的資質を育成する授業づくり—カンボジアスタディツアーを通して— (高校・総合的学習)

なお、実験授業の実施には、附属学校 (附属中学校, 附属高等学校, 附属駒場中・高等学校, 附属坂戸高等学校) を始めとして、市内及び近隣地域の公立・市立学校にもご協力いただいた。

(3) 「社会参画」を念頭に置いて学校と地域の連携の在り方を探究すること

筑波大学大学院博士前期課程教育学専攻の選択科目 (「社会科教育学特講」) を活用し、社会科教育を専門とする大学院生に協力してもらって、地域の特性を生かした学校教育の在り方を探究してきた。この取り組みでは、研究代表者である井田と研究分担者である國分が大学院生を引率し、毎年 11 月下旬～12 月上旬に、3 泊 4 日の調査研究を実施した。調査地域は、地域の特性が色濃く現出している地域、例えば、宮崎県高千穂町 (2009 年) や東京都利島 (2010 年) などがある。「社会参画」に基づく社会科 (地理歴史科・公民科) 授業を構想するためには、地域の特性を考慮しなければならないケースが少なくない。その際に単元開発者である教員は、その地域特性をどのように捉えるべきなのか。その理論と方法を明らかにしようとしたのが、この調査研究である。

4. 研究成果

上記の研究手法 (1) ～ (3) に対応させて、

以下に研究成果を述べる。

(1) 「社会参画」の枠組みを広く捉え、様々な授業の可能性を見出したこと

2009 (平成 21) 年 4 月に開始された本研究の前半部において、「比較 (外国) 研究」と「歴史研究」の両グループのメンバーが協力して、社会科教育研究・実践における「社会参画」の位置付けに関する研究を深めた。その成果として、社会科において「社会参画」に基づく授業を展開するにあたっては、「社会参画」の枠組みを広く捉え、様々な授業の可能性を拓いておくことが有効であろうという結論に至った。

当初イメージした「社会参画」に関する授業としては、実際に児童生徒が地域社会に体験的に参加して、公民的資質を身に付けるといったものがあつた。しかし、アメリカを中心とする海外の社会科の現状、さらには、戦前の社会科系教科・科目における実践などを概観していくと、この「社会参画」の枠組みを広げなければ、「社会参画」と関連する有意義な実践を射程に収めることができないということに気付いた。科学的な社会認識の育成を目指した授業も、意思決定や価値判断に力点を置いた授業も、本研究では『「社会参画」に基づく社会科授業』と捉えている。そうすることで、日本の社会科に「社会参画」が根付くと考えたわけである。

(2) 教室をベースにした授業でも、「社会参画」の授業が可能であることを示したこと

(1) に述べたように「社会参画」の枠組みを広げることによって、「社会参画」に基づく社会科 (地理歴史科・公民科) の授業は様々な様相を呈することになる。それは、これまでに蓄積されてきた 12 個の実践、そして、本書に収められた 5 個の実践からも明らかであろう。

むしろ、今では、地域社会や国際社会にお

ける体験的な学びは、教室における協同的な学びを基盤に持たなければ意味をなさない、とまで考えるに至っている。3年間にわたって大学院の協力の下で実践されてきた実践を振り返ると、「社会参画」に基づいて構想・実践された授業には、共通に三点の観点が備わっていることに気付く。それは、第一に、生徒の「探究」場面を確保していること、第二に、個々の探究を他者の探究と比較し、合意形成を図る「協同学習」の導入が図られていること、そして、第三に、望ましい社会の在り方に関して生徒の「提案」場面が保証されていること、の三つである。

(3)「社会参画」の授業の基盤となる、地域調査の多様な方法を示すことができたこと

社会科授業における単元開発にとって、教材研究は生命線となる。それは、いかなる種類の社会科授業であっても同じであろう。とりわけ、「社会参画」に関する授業では、具体的な地域社会の課題を取り上げるケースが多いため、授業者である教員には、地域調査を踏まえた教材研究の手法を身に付けていくことが重要になる。

このような問題関心に沿って、地域の特性を踏まえた学校教育の在り方を探究した結果、「社会参画」の授業づくりに役立つ、多様な地域調査の方法を見出すことができた(参考資料：井田仁康編著『地域と教育—地域における教育の魅力—』学文社, 2012年)。その中には、例えば、オーラルヒストリーという新しい歴史研究の枠組みを利用した地域調査、「鉄道」という一つの社会事象に注目しながら進められる地域調査、などがある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 14 件)

- ① IDA, Y. 2013 The continuity of geography learning contents in Japan. 第17回台湾地理国際学術会議研究大会論文集, 専2 pp.1-6 (査読無)
- ② 江口勇治・井田仁康 2013 新学習指導要領を社会科・地理歴史科・公民科で、どうとらえるのか、活かすのか. 日本教育研究連合会『記念誌第2集これからの学校教育の改善に資する提言—その理念と展望—』日本教育研究連合会、pp.25-33. (査読無)
- ③ 井田仁康・志村喬 2012 災害と子どもたちの教育を考える—東日本大震災ひ再学校の現在とこれからの地理学・地理教育地理、57-5、pp30-34. (査読無)
- ④ 井田仁康・吉田和義・平澤香・浅川俊夫 2012 日本の学校地理教育における現状と課題. E-journalGE0, 7-1, pp3-10. (査読有)
- ⑤ 井田仁康 2012 高等学校地理歴史科地理の必修化に向けて. 新地理、60-1, pp. 77-79. (査読有)
- ⑥ 井田仁康 2011 日本学術会議が提言した「地理基礎」の内容. 地理、56-11, pp43-48. (査読無)
- ⑦ 井田仁康 2011 持続可能な社会の形成のための社会科・地理歴史科—高等学校地理歴史科における融合科目の提案—. 社会科教育研究、No.113、pp.1-8. (査読有)
- ⑧ 井田仁康 2011 高校地理歴史科・必修修科目としての「地理基礎」案. 学術の動向、16-9, pp28-34. (査読無)
- ⑨ 井田仁康 2011 国際地理オリンピックの歩み. 地図中心、No.468, pp.5-7. (査読無)
- ⑩ IDA, Y. 2011 Children's recognition of cultural inheritance in the island of Yap. Ali Demirci, Lex Chalmers, Yilmaz Ari and John Lidstone eds. *Building Bridges between Cultures through Geographical Education. Proceedings of the IGU-IGC Istanbul Symposium: July 8-10, 2010*, Fatih University Publication, 2011 pp.279-285. (査読有)

⑪ IDA, Y. 2011 The trend of geography education in high school, Japan

第15回台湾地理国際学術会議研究大会論文集、専3 1-8. (査読無)

⑫ 井田仁康 2011 科学地理オリンピックの魅力・可能性と展望—国際地理オリンピックとの関わり—. 理科の教育、60-5 (No. 706), pp. 39-41. (査読無)

⑬ 井田仁康 2010 地形図でたどる「二十四の瞳」地図中心、No. 452, pp. 32-33. (査読無)

⑭ 井田仁康 2009 地域学習の普遍性と特殊性の問題. 社会科教育、No. 607, p. 40-41. (査読無)

[発表] (計7件)

① 井田仁康 The continuity of geography learning contents in Japan. 第17回台湾地理国際学術会議研究大会、台湾師範大学、2013年5月18日. 台湾

② 井田仁康 シンポ：これからの地理歴史教育を考える. 文部科学省指定研究会開発校シンポ、パネリスト・司会、日本橋女学館中・高等学校 2012年11月2日.

③ 井田仁康 ニュージーランド 社会科教育の立場から (シンポジウム：「オセアニア教育研究のこれから—研究方法をめぐって—」パネリスト オセアニア教育学会第15回大会、筑波大学、2011年11月26日.

④ IDA, Y. The trend of geography education in high school, Japan 第15回台湾地理国際学術会議研究大会、台湾師範大学、2011年5月22日. 台湾

⑤ IDA, Y. Children's recognition about cultural inheritance in Yap Island, Micronesia. IGU CGE Symposium in Istanbul-Turkey, Fatih University、2010年7月30日. トルコ

⑥ 井田仁康 地理教育における防災教

育 (シンポ：「「地理」で学ぶ防災」) 2010年日本地理学会春季学術大会、法政大学、2010年3月30日.

⑦ 井田仁康 2009 スキルとしての地図教育 (シンポ：「地図で広がる学びの輪」パネリスト) 日本国際地図学会平成21年度定期大会、立正大学、2009年8月3日.

[図書] (計5件)

① 井田仁康 編著 2012 『地域と教育—地域における教育の魅力—』学文社. pp. 1-2, pp. 245-257.

② 井田仁康・卯城祐司・塚田泰彦 編著 2012 『教科教育の理論と授業Ⅰ人文編』協同出版. pp. 111-129.

③ Ida, Y. and Yuda, M. 2012 Japan: GIS-enabled field research and a cellular phone GIS application in secondary school, Milson, A. J., Demirci, A. and Kerski, J. J eds. *International perspectives on teaching and learning with GIS in Secondary school*. Springer pp. 141-149.

④ 井田仁康 2011 「フィールドワークを通じた地域との連携」「自然と共生、そしてESD」岡本智周・田中統治編『共生と希望の教育学』筑波大学出版 pp. 214-225, pp. 341-344.

⑤ 谷川彰英監修 江口勇治・井田仁康・伊藤純郎・唐木清志 共編 2010 『市民教育への改革』東京書籍, pp. 6-9, pp. 44-47, pp. 170-173.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井田 仁康 (IDA YOSHIYASU)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：20203086

(2) 研究分担者

唐木 清志 (KARAKI KIYOSHI)
筑波大学・人間系・准教授
研究者番号：40273156

川崎 誠司 (KASAKI SEIJI)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：10282782

桐谷 正信 (KIRITANI MASANOBU)
埼玉大学・教育学部・准教授
研究者番号：90302504

磯山 恭子 (ISOYAMA KYOKO)
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号：90377705

木村 勝彦 (KIMURA KATSUHIKO)
茨城大学・教育学部・教授
研究者番号：60241759

佐藤 公 (SATO KO)
武蔵野大学・文学部・准教授
研究者番号：90323229

熊田 禎介 (KUMATA TEISUKE)
宇都宮大学・教育学部・准教授
研究者番号：90375519

斎藤 之誉 (SAITO YUKITAKA)
麗澤大学・経済学部・准教授
研究者番号：50458634

江口 勇治 (EGUCHI YUJI)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：50151973

